様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　７ 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：２３８０４
研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化(B)）
研究期間：2020～2024
課題番号：２０ＫＫ０００４

研究課題名（和文）タジキスタンのゾロアスター教・仏教に関する総合的研究：遺跡と写本

研究課題名（英文）Comprehensive Study on Zoroastrianism and Buddhism in Tajikistan

研究代表者
青木　健（AOKI, Takeshi）

静岡文化芸術大学・文化政策学部・教授

研究者番号：５０７４５３６２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,900,000円

研究成果の概要（和文）：イラン領域外の旧ソ連圏のゾロアスター教遺跡を中心に調査することによって、従来はイラン国内の遺跡を基準として研究されてきたゾロアスター教研究の視野を、中央アジアやコーカサス諸国にまで拡大することが出来た。ゾロアスター教と称される宗教の内実は、実際には多種多様で、時代と地域によって様々なタイプのゾロアスター教が存在することが確認できた。また、その過程で、大乗仏教やイスラームと云った地域的な宗教との習合の状況も、考古学的な資料によって確認した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ゾロアスター教研究の視野の拡大は、同時に、シルクロードに関する新たな知見を齎す。従来は大乗仏教の伝播として理解されていた事象が、実際には大乗仏教とゾロアスター教が習合した文化現象として理解されるようになってきた。このことは、古代日本文化の形成過程にも、イラン文化が一定の影響を及ぼしていた可能性を示唆するものであり、古代日本史理解にも、一定の影響を及ぼす。

研究成果の概要（英文）：By focusing on Zoroastrian ruins outside of Iran in the former Soviet Union, we were able to expand the scope of Zoroastrian research, which had previously been based on ruins within Iran, to Central Asia and the Caucasus. We were able to confirm that the religion called Zoroastrianism is in fact diverse, with various types of Zoroastrianism existing depending on the era and region. In the process, we also confirmed through archaeological materials the state of syncretism with regional religions such as Mahayana Buddhism and Islam.

研究分野：宗教学

キーワード：ゾロアスター教　タジキスタン　パミール

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

（1）ゾロアスター教研究に於けるイランと中央アジアの地域差：ゾロアスター教とは、紀元前 1000 年紀から 7 世紀までの間に、イラン高原と中央アジアのイラン系民族を中心に広まった民族宗教である。この分布域は、地理的にシルクロードの中央部付近を占めており、飛鳥・奈良時代にシルクロードを通って伝来した大陸文化を受容した古代日本とも、多少の接点を有する宗教である。

旧ソ連が崩壊する 1991 年までは、この分布域は、イラン高原が西側陣営、中央アジアが東側陣営と、政治的に二分されていた。従って、イラン高原の遺跡を基準としてゾロアスター教を論じる西側陣営の研究者の成果と、中央アジアの遺跡を基準としてゾロアスター教を論じる東側陣営の研究者の成果は、往々にして齟齬を来たし、議論がすれ違う弊害があった。例えば、ゾロアスター教の葬法である。イラン高原のゾロアスター教徒は、鳥葬にしたあと、遺骨は断崖絶壁の横穴に納める。しかし、中央アジアのゾロアスター教徒は、鳥葬にしたあと、遺骨は納骨器オスアリに納めて地中に埋める。

また、ゾロアスター教が拝火教か多神教かの議論も、地域差に還元される部分が大きい。イラン高原のゾロアスター教徒は、3 世紀の偶像破壊運動を通じて、拝火儀礼を最も重視する宗教になっていた。統一的な王権（サーサーン朝ペルシア帝国）に支えられているので、この教義がイラン高原全土を覆っていた。しかし、中央アジアのゾロアスター教徒は、メソポタミア、インドなどから流入してくる様々な神格を受容し、少なくとも外見的には多神教の観を呈していた。しかも、中央アジアには統一的な王権が存在せず、各オアシスに独自の都市国家が成立している社会構造なので、オアシス都市国家ごとに独自の多神教的ゾロアスター教が存在しているような状況になっていた。

このように、イラン高原と中央アジアでゾロアスター教像が大きく乖離し、更には中央アジアの内部でもゾロアスター教像が拡散している。このため、それぞれの地域のゾロアスター教を研究している研究者が頭に思い描く「正統的ゾロアスター教像」は、地域によってバラバラの状況が続いた。

（2）ゾロアスター教研究に於ける中央アジア内部での地域差：旧ソ連の崩壊後に、この地域差に起因する研究齟齬の弊害が解消されたかと言えば、そうではない。中央アジア 5 ヶ国の中でも貧富の格差は拡大しており、2022 年のデータでは、各国の GDP は、カザフスタン（2243 億 USD）、ウズベキスタン（791 億 USD）、トルクメニスタン（744 億 USD）、タジキスタン（100 億 USD）、キルギスタン（98 億 USD）と、かなりの差がある。

21 世紀には、旧西側陣営の諸国との学術交流を活発に行えるカザフスタンやウズベキスタンと、そうではないタジキスタンやキルギスタンとの間で、ゾロアスター教の認識には大きな乖離が生じた。旧西側諸国からしても、カザフスタンやウズベキスタンの学術情報は比較的容易に入手できるのに対して、タジキスタンやキルギスの学術情報の入手はかなり難しい状況にある。（鎖国状態のトルクメニスタンは、ここでは除外する。）

２．研究の目的

（1）研究の焦点＝タジキスタン：中央アジアは、民族の興亡が激しい地域である。9 世紀以前には、イラン系住民が多く、彼らの生活習慣がゾロアスター教に直結していた。しかし、10 世紀以降には、トルコ系住民の移住が始まり、住民の多くがイラン系からトルコ系に変貌した。また、これと同時に、宗教的にはイスラームが優勢になった。

現在の中央アジア諸国の中では、

①カザフスタン・・・トルコ系
②ウズベキスタン・・・トルコ系（都市住民の一部がイラン系）
③トルクメニスタン・・・トルコ系
④タジキスタン・・・イラン系
⑤キルギス・・・トルコ系

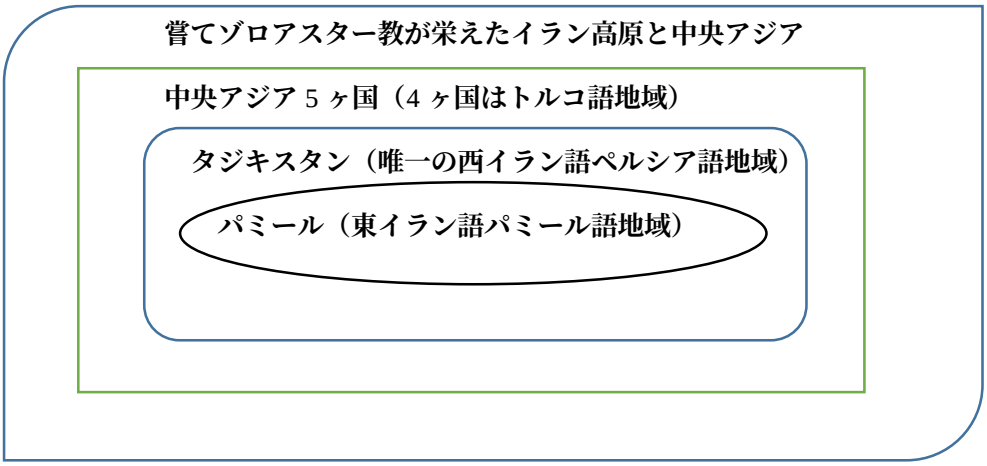
との色分けになる。従って、中央アジアのゾロアスター教文化を研究目的とする場合、最も成果を期待できる国は、タジキスタンと考えられる。

（2）中央アジアのゾロアスター教像の統合：このタジキスタンでは、タジキスタン・アカデミーによって細々と古代遺跡の調査が続けられている。ローシャン近郊の伝・ゾロアスター教遺跡や、ヴラングの伝・ゾロアスター教・仏教遺跡などである。しかし、それらの遺跡で得られた知見は、汎中央アジア的なゾロアスター教研究の視点から文脈化されているわけではないし、ましてやイラン高原のゾロアスター教と関連付けられることは稀だった。これには、言語的な分断が大きく作用していると考えられる。タジキスタン以外の中央アジア 4 ヶ国の公用語はトルコ系言語であるのに対し、タジキスタンだけは公用語が西イラン系のペルシア語である。

また、タジキスタンの東方半分は、ゴルノ・バダフシャン自治州と呼ばれ、（民族的な意味での）タジク人ではなくパミール人が住んでいる。このゴルノ・バダフシャン自治州の共通語は、東イラン系のパミール語であり、同じイラン系言語とは言え、平野部に住んでいるタジク人が話

す西イラン系のペルシア語と、山岳部に住んでいるパミール人が話すパミール語では、意思の疎通が困難である（通常、少数派であるパミール人がペルシア語を修得する）。而して、近年発見されているタジキスタン国内のゾロアスター教遺跡は、平野部ではなく山岳地帯に位置しており、このパミール人地域に集中している。

つまり、ゾロアスター教研究に関する地域は、何重もの入れ子構造になっており、政治的・言語的に分断されている。而して、研究代表者が最も重視するタジキスタン国内のパミール高原は、この入れ子構造の最深部に位置しており、しかも、ここがゾロアスター教発祥の地の一つの候補とされている。従って、研究代表者の見通しとしては、この地域の古代遺跡の調査によってゾロアスター教の原点を把握し、ここを起点にして中央アジアのゾロアスター教像を統合できると考えた。



（3）ゾロアスター教遺跡と大乗仏教遺跡の融合：また、パミール高原は、シルクロードの天山南路と南路がパミール越えをする要衝に位置しており、インドからイラン高原東部に伝播した大乗仏教の要地でもある。上述のヴランダのように、ゾロアスター教のものなのか、大乗仏教のものなのか、判別が困難な遺跡もある。副次的には、これらの遺跡を実見し、ゾロアスター教と大乗仏教が融合した状況の把握も目的である。

（4）古代日本史への還元：更には、この地域でゾロアスター教と大乗仏教が融合していたとすれば、それがそのままシルクロードを経由して、飛鳥・奈良時代の日本に到来していた可能性もある。ここまで出来るかどうか分からないが、古代日本史への還元も、本研究の目的である。

３．研究の方法

（1）パミール人の人脈：この研究の中核は、タジキスタン国内のパミール高原に残るゾロアスター教・大乗仏教の遺跡、或いはパミール人の間に残るゾロアスター教的な習慣である。これを調査する為には、パミール人の間にアカデミックな人脈が必要である。タジキスタン平野部（特に首都ドゥシャンベ）に出ているパミール人で、近世ペルシア語が流暢であり、且つ英語にも通じており（タジキスタンの学術語はロシア語なので、英語に通じた研究者は少ない）、しかも古代パミール史を専攻しているとなると、人選はなかなか難しかった。しかし、幸いにも、タジキスタン国立大学大学院を修了し、タジキスタン古代博物館に勤務する古代パミール史研究者の面識を得ることが出来、研究協力の約束を取り付けた。

（2）現地のゾロアスター教遺跡の調査：また、研究代表者の理解の中では、パミールを中心にして同心円状に中央アジアに拡大していったゾロアスター教の状況を把握するためには、他の中央アジア諸国に於けるゾロアスター教遺跡の実見も欠かせない。祭礼や建築と云った民俗的な部分については、いまでもイラン系民族が住んでいるタジキスタン国内ならば、一定の成果が期待できる。しかし、イラン系民族からトルコ系民族に入れ替わったその他の中央アジア 4 ヶ国であれば、この民俗的な部分には期待できない。あくまで、ゾロアスター教遺跡（及び仏教遺跡）の調査に留まる。

（3）研究会：更に、できる限り、パミール高原周辺の古代文化に興味を持つ研究者による情報交換を緊密にすべく、研究会も組織した。これは、タジキスタンのパミール人研究者、及び日本在住のフンザ人学生の協力を得て、パミール人・フンザ人（パキスタン北部在住のイラン系民族）の現地での習慣に関する聞き取り調査として機能した。

４．研究成果

（1）現地調査の成果：この研究は 2020 年 10 月から開始されたが、2020 年 1 月から 2023 年 5 月にかけて、Covid-19 が世界的に流行し、世界保健機関が緊急事態を宣言するに至った。このために、当初計画していた海外調査が全く実施できなくなった。辛うじて 2023 年夏以降、研究期間を 1 年延長するなどして、下記の調査を実施した。

- 2024 年 8 月・・・アゼルバイジャン：バクー、クバ（ヒナリグ、ソホブ）、ザガタラ（ペリガラ）

- 2024 年 8 月～9 月・・・ジョージア：シグナギ（ネクレスィ）、トビリシ（グラクリアニ）
- 2024 年 9 月・・・コニヤ、アンカラ
- 2025 年 2 月・・・ウズベキスタン：シムケント
- 2025 年 2 月・・・カザフスタン：タシケント、カンカ

残念ながら、肝心のタジキスタンのゴルノ・バダフシャン州は、現地の治安情勢が悪化した為に訪問できなかった。また、2025 年 3 月には、タジキスタンのゴルノ・バダフシャン州と同じ文化圏に属するパキスタンのフンザの訪問を計画していたものの、直前にパキスタンで大規模テロがあったために、実行を断念せざるを得なかった。

即ち、タジキスタン・パミールのゾロアスター教遺跡（及び仏教遺跡）の調査を意図したにもかかわらず、Covid-19 とテロの影響によって、遂にそこには到達できず、その代わりに、周辺の中央アジア諸国に於けるゾロアスター教遺跡の情報だけはふんだんに蒐集できた。その一覧表は、下記の通りである（日程順）。

国	訪問地	日時
アゼルバイジャン	ヒナリグ村のゾロアスター教拝火神殿	2024 年 8 月 25 日
	ヒナリグ村の民族博物館	同上
	ソホブ村のゾロアスター教ダフマ	2024 年 8 月 26 日
	マガラ洞窟	同上
	ペリガラのゾロアスター教遺跡	2024 年 8 月 28 日
	ザガタラ歴史博物館	同上
ジョージア	ネクレスィのゾロアスター教遺跡	2024 年 8 月 30 日
	トビリシのジョージア国立博物館	2024 年 8 月 31 日
	トビリシ市内のゾロアスター教拝火神殿遺跡	2024 年 9 月 1 日
	グラクリアニのゾロアスター教遺跡	2024 年 9 月 2 日
トルコ	シャンル・ウルファの考古学博物館	2024 年 9 月 5 日
	コニヤで下記の研究会議	2024 年 9 月 7 日
	アンカラの考古学博物館	2024 年 9 月 11 日
カザフスタン	シムケント古代遺跡	2025 年 2 月 18 日
	シムケント郊外のゾロアスター教遺跡	2025 年 2 月 19 日
	南カザフスタン博物館	同上
ウズベキスタン	ハムザ研究所	2025 年 2 月 21 日
	ミン・オリク遺跡	同上
	カンカ遺跡	2025 年 2 月 22 日
	タシケント歴史博物館	2025 年 2 月 23 日
	アク・テペ遺跡	同上

これ自体は、日本のゾロアスター教研究の視野を中央アジア諸国やコーカサス諸国に拡大する貴重な資料である。しかし、それを文脈付ける為には、タジキスタンのゴルノ・バダフシャン州（パミール高原）の調査が不可欠だったにもかかわらず、これを果たせていない。その結果、扇の要の部分の調査が欠け、扇の端の部分の成果が大量に挙がると云う不均衡が生じた。成果の発表に当たっては、タジキスタンのゴルノ・バダフシャン州（パミール高原）の治安の安定を待ち、ここを調査した上で、従来案の通りに文脈付けるべきか、それとも、相互に関連付けられていない資料を先行してバラバラに公表するべきか、非常に悩ましいところである。

（2）研究会の成果：研究会についても、世界保健機関の緊急事態宣言が解除された 2023 年 5 月以降の開催にずれ込んだ。具体的には、以下のように 6 回開催した。

回数	日程	場所	参加者
第 1 回	2023 年 6 月 19 日	立教大学	フンザ人学生、青木
第 2 回	2023 年 7 月 2 日	大船の会議室	フンザ人学生、日本人学生、青木
第 3 回	2023 年 12 月 4 日	立教大学	パミール人研究者、日本人学生、青木
第 4 回	2024 年 2 月 21 日	静岡文化芸術大学	日本人考古学者、青木
第 5 回	2024 年 9 月 7 日	トルコのコニヤ	パミール人研究者、日本人研究者、青木

第 6 回	2025 年 3 月 23 日	静岡文化芸術大学	日本人考古学者、フンザ人学生、日本人学生、青木

この中では、パミール人研究者から、①パミール高原での表面的なイスマーイール派信仰、②禁欲修行者スーフィーの存在、③火を用いた儀礼の持続、④太陽崇拝を意味するパミール建築の模様、⑤現地に於ける伝・ゾロアスター教遺跡、伝・大乗仏教遺跡などの情報を聞き取った。また、フンザ人学生からは、①フンザの牧畜の夏営地で 1980 年代まで行っていた拝火儀礼、②特徴的なイスマーイール派信仰、③フンザで話されているワヒー語（東イラン語）などの情報を聞き取った。

これらの情報は、実際にタジキスタンのゴルノ・バダフシャン州（パミール高原）およびパキスタンのフンザの調査で活用されるべきものである。しかし、残念ながら、情報は入手したものの、治安の関係で現地を訪問できず、この情報を学術論文として成立させる目処が立たないのが実情である。

（3）古代日本史への還元：タジキスタンのゴルノ・バダフシャン州（パミール高原）に於ける伝・大乗仏教遺跡を実見できるとの前提に立って、下記のような古代日本の遺跡の調査も行った。

回数	日程	場所	参加者
第 1 回	2024 年 5 月 8 日	奈良県奈良市の頭塔	日本人考古学者、青木
第 2 回	2024 年 5 月 9 日	大阪府堺市の土塔	日本人考古学者、青木
第 3 回	2024 年 12 月 4 日	岡山県赤磐市の熊山遺跡	日本人考古学者、青木
第 4 回	2024 年 12 月 7 日	兵庫県高砂市の石之宝殿遺跡	日本人考古学者、青木
第 5 回	2024 年 12 月 7 日	兵庫県佐用郡佐用町の納経遺跡	日本人考古学者、青木

これらは、古代日本史上で、説明が付かない部分が多くある遺跡と聞く。シルクロードの中継地点であるタジキスタンのゴルノ・バダフシャン州（パミール高原）の伝・仏教遺跡との類似点を探る上で貴重なデータの蒐集だけは完了した段階である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 青木健	４．巻 785
２．論文標題 アゼルバイジャンとタジキスタンのゾロアスター教遺跡	５．発行年 2023年
３．雑誌名 考古学ジャーナル	６．最初と最後の頁 32-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 青木健	４．巻 22
２．論文標題 飛鳥・奈良と汎ユーラシアのイラン文化18：長安（西安）・その2	５．発行年 2022年
３．雑誌名 奈良県立大学ユーロナラジア	６．最初と最後の頁 34-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 青木健	４．巻 23
２．論文標題 飛鳥・奈良と汎ユーラシアのイラン文化19：「陸のイラン」と「海のイラン」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 奈良県立大学ユーロナラジア	６．最初と最後の頁 18-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 青木健	４．巻 24
２．論文標題 飛鳥・奈良と汎ユーラシアのイラン文化 20：「海のイラン」 とゾロアスター教	５．発行年 2023年
３．雑誌名 奈良県立大学ユーロナラジア	６．最初と最後の頁 20-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 青木健	4．巻 22
2．論文標題 ペルシア湾岸の石窟遺跡とイラン仏教の可能性	5．発行年 2022年
3．雑誌名 静岡文化芸術大学研究紀要	6．最初と最後の頁 69-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 青木健	4．巻 27
2．論文標題 飛鳥・奈良と汎ユーラシアのイラン文化23：「火神の国」とゾロアスター教・その1	5．発行年 2025年
3．雑誌名 奈良県立大学 ユーロナラジア	6．最初と最後の頁 50-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 青木健	4．巻 28
2．論文標題 飛鳥・奈良と汎ユーラシアのイラン文化24：「火神の国」とゾロアスター教・その2	5．発行年 2025年
3．雑誌名 奈良県立大学 ユーロナラジア	6．最初と最後の頁 32-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　2件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 青木健
2．発表標題 火の道
3．学会等名 第4回奈良ゾロアスター教フォーラム（奈良県立大学）（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2023年

１．発表者名
Takeshi AOKI

２．発表標題
Iran-Japan Cultural Contact in Historical Context

３．学会等名
“MA” Art and Space in-Between Iran / Japan (Tehran University, Iran)（招待講演）（国際学会）

４．発表年
2022年

１．発表者名
青木健

２．発表標題
イランの仏教

３．学会等名
第62回日本オリエント学会

４．発表年
2020年

１．発表者名
青木健

２．発表標題
瑣羅亞斯德教在古代伊朗、中國、日本

３．学会等名
Lecture at Dunhuang Academy of Northwest Normal University (Dunhuang, China)（国際学会）

４．発表年
2024年

１．発表者名
青木健

２．発表標題
シルクロードの宗教と伝承－マニ教・大乗仏教・カッラーミー派－

３．学会等名
説話・伝承学会2025年度春季大会

４．発表年
2025年

〔図書〕　計3件

1．著者名 青木健（共著）	4．発行年 2024年
2．出版社 京阪奈情報教育出版	5．総ページ数 115
3．書名 奈良でゾロアスター教（奈良県立大学ユーラシア研究センター学術叢書3）	

1．著者名 青木健	4．発行年 2023年
2．出版社 京阪奈情報教育出版	5．総ページ数 186
3．書名 ゾロアスター教とソグド人（奈良県立大学ユーラシア研究センター学術叢書2）	

1．著者名 青木健	4．発行年 2022年
2．出版社 京阪奈情報教育出版	5．総ページ数 216
3．書名 ゾロアストリアニズムと奈良（奈良県立大学ユーラシア研究センター学術叢書1）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

―

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	川上　洋一 (Kawakami Yohichi) (10250383)	奈良県立橿原考古学研究所・調査部・部長 (84602)	

6．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	井上　貴恵 (Inoue Kie) (70845255)	明治大学・文学部・専任講師 (32682)	
研究分担者	大西　貴夫 (Onishi Takao) (80260371)	奈良県立橿原考古学研究所・調査部調査課・指導研究員 (84602)	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関